The Making of Biblical Womanhood

「聖書的な女性の役割」とされるものの創出

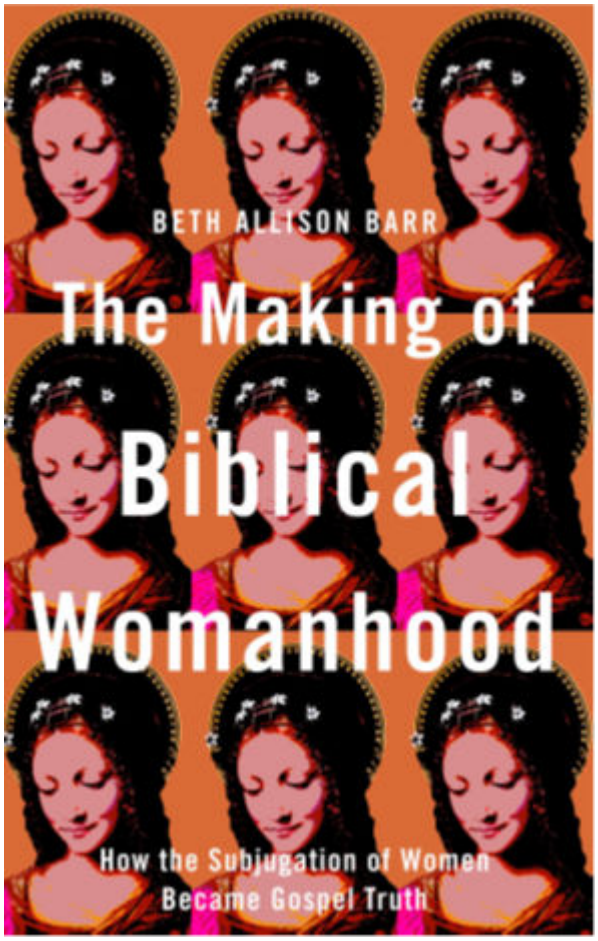
How the Subjugation of Women Became Gospel Truth

女性の従属はいかにして福音の真理となったか

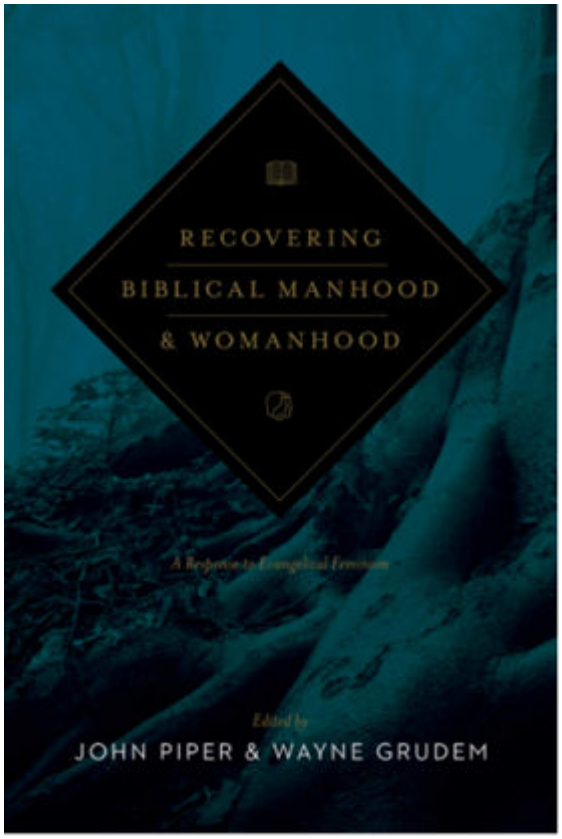
著者：ベス・アリソン・バー（Beth Allison Barr）、ベイラー大学（Baylor University）歴史学教授（専門は中世）

ベス・アリソン・バー ・ ドイツ語訳：Hans-Jörg Ronsdorf ・ 2021年4月 ・ 2026年10月改訂

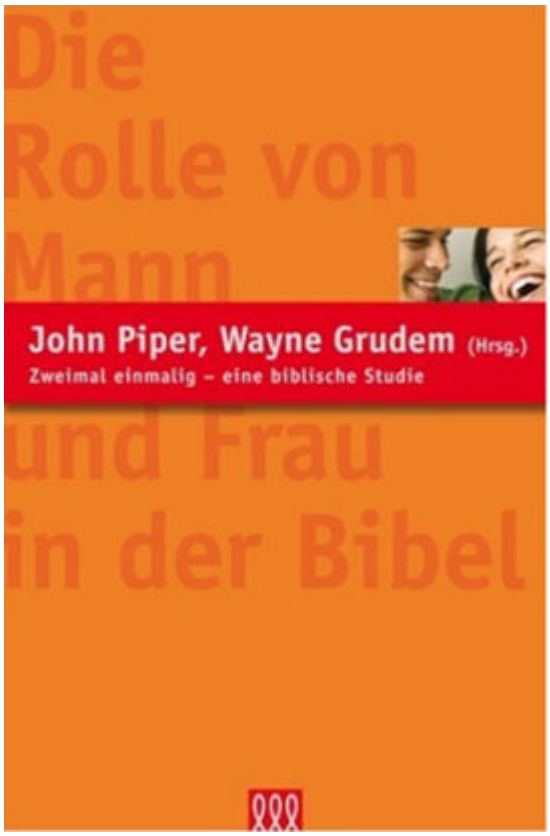
この本は、1991年にアメリカで出版された本『Recovering Biblical Manhood & Womanhood』に対する応答の一つです。この本は、結婚、教会、社会における男性と女性について、明確に階層的な役割理解を主張しています。2008年からはドイツ語でも入手できます（下記参照）。著者ないし編者は、ウェイン・グルーデム（Wayne Grudem）（ドイツ語でも入手できる『Biblische Dogmatik』で知られる）と、著名な神学者ジョン・パイパー（John Piper）です。



これは次の本への応答です：



ドイツ語版：



https://www.3lverlag.de/schnellbestellung/289-die-rolle-von-mann-und-frau-in-der-bibel.html

目次

謝辞

序論

1. 家父長制の始まり
2. もし「聖書的な女性の役割」がパウロに由来するものではないとしたら？
3. 私たちの選択的な中世の記憶
4. 宗教改革が福音派の女性たちに払わせた代価
5. 英語聖書から女性たちが消されたこと
6. 服従の聖化
7. 「聖書的な女性の役割」を福音の真理に祭り上げること
8. 今こそ女性たちを解き放つ時ではないでしょうか？

第2章 試し読み（翻訳、脚注なし）

もし私たちの「聖書的な女性の役割」がパウロに由来するものではないとしたら？

「私はパウロが大嫌い！」

学生たちからこのことばを何度聞いたか、とても言い尽くせません。たいていは若い女性たちで、パウロが自分たちに不利に用いられてきたことによって傷つき、まさに傷跡を負っている人たちです。彼女たちは、黙っていなければならない（コリント第一14章）、夫に従わなければならない（エペソ5章）、男性に教えたり男性の上に権威をふるったりしてはならない（テモテ第一2章）、家で働かなければならない（テトス2章）と言われてきました。彼女たちは、神は女性が男性の指導に従うように定められた（コリント第一11章）、家族と家庭に集中するように定められた（コロサイ3章、ペテロ第一3章）、そして家族以外の仕事は女性にとって二の次であるべきで、するとしても多くは必要に迫られてか、子どもたちが家を出た後である、と教えられてきました。

数年前、一人の女子学生が私の研究室に来ました。表向きはレポートについて話し合うためでしたが、彼女が本当に話したかったのは自分の召命のことだと、すぐにわかりました。彼女は私に尋ねました。神はあなたを、教授であり、母であり、牧師の妻でもあるように召されたのですか。大変でしたか。家の外で働くことに罪悪感はありましたか。ご主人は支えてくれましたか。あなたの教会の人たちはどう思っていましたか。彼女は、保守的な環境で育った、キャリア志向

のキリスト者として、教会と家族の期待を自分の職業上の目標と調和させようとすることへのいら立ちを語りました。最近父親と交わした会話に、彼女は腹を立てていました。自分の専攻のことが心配で、父親に助言を求めたのです。父親は、どうせ結婚して働かないのだから専攻はそれほど重要ではない、と言って彼女の不安をなだめようとしました。ショックを受けた彼女は言い返しました。「パパ、本当に私を四年間大学に行かせて、学位を一度も使わせないつもりなの？」

家の外で働く女性に対するこの父親の態度は、珍しいものではありません。すでに見たように、2017年のバーナ（Barna）の調査によれば、アメリカ人は一般に、指導的な役割に就く女性にますます抵抗を感じなくなっており、職場で女性が直面するかなりの障害についての理解も深まっています――しかし福音派のキリスト者は後れを取っています。福音派の意識における最も驚くべき隔たりは、おそらく特定の指導的役割に就く女性に関するものです。2016年に私は、女性は決して男性の上に権威をふるうべきではないというウェイン・グルーデムの女性観では、彼が女性の大統領候補を支持することは不可能だ、とコメントしました。バーナの調査は、私が正しかったことを示唆しています。グルーデムのように、ドナルド・トランプ（Donald Trump）の大統領選出馬を支持した白人の福音派指導者たちは、女性大統領に最も抵抗を感じるグループに属しています。少なくとも一部の福音派および共和党の有権者（27～35パーセント）にとって、ヒラリー・クリントン（Hillary Clinton）の問題は、彼女が民主党員であることだけでなく、女性であることでもありました（福音派の有権者の27パーセント、共和党の有権者の35パーセントが、女性大統領には抵抗があると答えました）。三年後、エリザベス・ウォーレン（Elizabeth Warren）の大統領選出馬が同じ性別による断頭台にかけられたことに、私は驚きませんでした。

考えは影響をもたらします。こうした福音派の確信――なぜ彼らが女性の服従は動かしえないものだと主張するのか――は、彼らがパウロをどう解釈するかに根ざしています。Council on Biblical Manhood and Womanhood は、補完主義[1]の概説を創世記2章から始めているかもしれませんが、その創造物語の読み方は、コリント第一11章とテモテ第一2章から来ています。パウロのことばが、補完主義の教えのあらゆる側面を決定しているのです。福音派は、パウロのテキストを、性別の間の永続的で神によって定められた役割の違いを決めるものであるかのように読みます。男性は、女性が持っていない権威をふるうのです。

男性が導き、女性が従う。パウロがそう言っている、というわけです。

私の学生たちがパウロを嫌うのも無理はないのではないでしょうか。

しかし、もし私たちがパウロを読み違えてきたとしたらどうでしょう。私たちの青少年伝道の初期のころ、夫と私はある若者たちのグループを、週末の伝道集会に連れて行きました。講演者の一人が、自分の秘密の伝道の武器を明かしました――「もしあなたが間違っていたらどうしますか」という問いです。その集会のことはあまり覚えていませんが、この問いは心に残りました。私は歴史家としての仕事において、この問いが役に立つと感じてきました――もし私の結論が間違っていたらどうだろうか。私は証拠を考え直す用意があるだろうか。教師としても、とりわけ学生が私に違う考えを示すときに、この問いが役に立つと感じてきました。「もし私が間違っていたら？」という問いは、私が他の人にもっとよく耳を傾ける助けになります。それは私を謙虚に保ちます。それは私をより良い研究者にしてくれます。

そこで、補完主義の福音派の皆さんへの私の問いはこうです。もしあなたがたが間違っていたらどうでしょうか。もし福音派が、パウロが理解されたいと願っていた仕方でではなく、現代文化というレンズを通してパウロを理解してきたとしたらどうでしょうか。福音派の運動は、女性の指導を認めることは文化的な圧力に屈することを意味すると恐れています。しかし、もし教会が女性の指導を拒むことによって、文化的な圧力に屈しているとしたらどうでしょうか。もし私たちのパウロ解釈――そしてその結果としての、女性の指導的な務めからの排除――が、「素朴で自然な」読み方から生まれたのではなく、私たちが周囲の態度や思考パターンに合わせてきたことから生まれたのだとしたらどうでしょうか。過去のキリスト者たちは、女性を指導から排除するためにパウロを用いたかもしれません。しかしそれは、女性の服従が聖書的であることを意味しません。それはただ、今日のキリスト者が過去のキリスト者と同じ過ちを繰り返していることを意味するだけです――つまり、私たちが女性への接し方を、イエスが可能だと示してくださる世界にではなく、私たちの周りの世界に合わせているということです。

ですから、私の学生たちが「パウロが大嫌い」と言うとき、私はこう答えます。あなたがたが嫌っているのはパウロではありません。むしろ、パウロの手紙が、女性を抑圧する聖書的な性別役割の理解の土台になってしまったことを嫌っているのです。パウロ研究の第一人者であるビヴァリー・ロバーツ・ガヴェンタ（Beverly Roberts Gaventa）は、福音派が「厳格に従わなければならない神学的言明や倫理的指針を求めて、パウロの手紙の行を探し回る」ことにあまりに多くの時間を費やしてきたために、私たちはパウロのより大きな目的を見逃してきた、と嘆いています。私たちは、一つになることへの彼の呼びかけを、画一性のために境界を見張ることへと矮小化してきました。私たちは、キリストのからだの「急進的な性格」を、性別と権力の硬直した階層と取り替えてしまいました。ガヴェンタが訴えるように「パウロと共に考える」代わりに、福音派はパウロを、自分たち自身の文化戦争のための武器に変えてしまったのです。新約学者のボイキン・サンダース（Boykin Sanders）は、女性に関しては、今こそパウロを正しく理解すべき時だと述べています。「男も女もない」という見出しのもと、太字で彼はこう論じています。「ここで黒人教会にとっての教訓は、教会の働きにおける性差別は受け入れられないということである。」パウロは私たちに、性差別が「この世のやり方への逆戻り」であることを示しており、私たちは「十字架につけられたキリストの福音の新しい世界」へと召されているのです。

真実は――福音派の現実は――、私たちがパウロを自分たちに合わせることにあまりに集中してきたために、パウロが私たちに呼びかけていること、すなわちキリストにあって一つになることに自分たちを合わせるのを忘れてしまった、ということです。より良いほうを選び、「十字架につけられたキリストの福音の新しい世界」をつかむ代わりに、私たちは、人間がいつもしてきたことを続けることを選んできました。すなわち、階層と権力という自分たち自身の塔を建てることです。

私たちはパウロを違った仕方で読むことができるから

私のお気に入りの結婚についての説教を書いたのは、中世の一人の司祭です。彼の名を知る人は多くありません。もっとも、ドロシー・L・セイヤーズ（Dorothy L. Sayers）は、推理小説の古

典『The Nine Tailors』（ドイツ語題『Die neun Schneider』。これも私のお気に入りの一つです）で彼のことばを引用して、私の心を奪いました。彼の名はジョン・ミルク（John Mirk）といい、十四世紀後半から十五世紀初めにかけてイングランド西部に住んでいました。彼の説教集『Festial』はイングランドで人気を博しました――あまりに人気があったので、1547年に出された公式のプロテスタント説教集の初版は、一部にはこの影響に対抗するために書かれたほどです。『Festial』の説教が宗教改革の前夜まで印刷されていたこと、そして『Festial』がカトリックの教理を含んでいたにもかかわらず、エリザベス1世の治世の間ずっと説教され続けていたことを示す証拠があります。

この『Festial』の説教が、夫と妻の夫婦関係をどのように描いているか聞いてください。「それゆえ男は、神の命令に従って、同じ年頃で、同じ身分で、同じ生まれの妻をめとるべきである。」テキストはこう続きます。「それゆえ男は父と母を離れ、自分自身の一部のもとへ行くように彼女のもとへ行くべきである。そして彼女は彼を愛し、彼は彼女を愛し、真実に互いに愛し合い、二人は一体となるべきである。」この説教が強調しているのは階層ではなく、夫と妻がどのように「真実に互いに」愛し合い、「一体」となるべきかということです。司祭が妻の指輪を祝福するとき、彼は、その指輪が「始まりも終わりもない神を表しており、心臓へと通じる血管のある彼女の指にそれをはめるのは、彼女が何よりもまず神を愛し、それから夫を愛すべきことを示すためである」と説明します。指輪は、女性の忠誠がまず神に、それから夫に属することを告げているのです。この説教は聖書の箇所に満ちていて、創世記1-3章、マタイ22章、ヨハネ2章から豊富に引用していますが、パウロは引用していません。エペソ人への手紙、コロサイ人への手紙、テトスへの手紙、あるいはペテロの手紙第一への言及さえありません――妻たちに夫に従うよう求める勧めを含んでいることでよく知られている新約聖書の文書です。「家庭訓」[2]として知られるこれらの新約聖書の箇所（エペソ5:21-6:9、コロサイ3:18-4:1、ペテロ第一2:18-3:7、テトス2:1-10）は、性別役割についての現代の議論を支配しており、妻は夫の権威に「快く従う」べきだという、1998年の「Baptist Faith and Message」への追加条項における変更の土台となりました。しかしミルクの中世の説教は、「結婚生活をよく送るための土台として、妻の服従をほとんど重視していない」と、歴史家クリスティン・ピーターズ（Christine Peters）は述べています。ミルクは、妻が夫に従うべきだとは説明していません。実際、彼の説教は、エバが困難に陥ったのはまさに夫を愛しすぎたからだと強調しています。ですから結婚指輪は、妻が夫のものであることのしるしではありません――それは妻たちに、神を第一とするよう思い起こさせるものなのです。

私は研究の中で、中世後期のイングランドの説教では、私の学生たちが反発しているパウロの箇所がめったに説教されていなかったことを発見しました。これは現代の福音派の世界における説教との重大な違いです――そして、中世の世界が古代や私たちの現代の世界と同じように家父長制に傾いていたことを考えると（これについては次の章で詳しく述べます）、かなり驚くべきことです。それはまた、女性についてのパウロの文書について私たちが教えられてきたこと――すなわち、男性が導き女性が従うべきだという神の計画を維持するために、それがキリスト教の歴史全体を通して一貫した筋道として用いられてきたということ――とも重大な違いです。

それはまったく事実ではありません。たとえばカトリックを例にとってみましょう。福音派は、カトリックの伝統は女性を叙階しないのだから、結婚における男性のかしらであることを支える

ためにパウロを持ち出しているに違いない、と考えているようです。そうではありません。少なくとも一貫してそうではありません。宗教学者のダニエル・セレ（Daniel Cere）はこう説明しています。「カトリックの伝統において、［夫婦間の］服従を支持する正式な教えの伝統があったことは一度もない。」中世史家のアルクイン・ブレイマイアーズ（Alcuin Blamires）は、性別、権威、そしてキリストのからだについての中世カトリックの教えにつきまとった「悩ましい逆説」（実践的なものと聖書的なものの両方）について述べています。たとえば、夫たちは罪を犯したので、しばしば妻たちにとって悪い指導者であることが明らかになりました――そうして中世の説教者たちにとって、男性の権威の「基準線」はぼやけてしまったのです。十五世紀初めのあるテキストが論じたように、妻は盲目的に夫に従うべきではありませんでした。なぜなら、ミルクの結婚説教にもあるように、彼女はまず、自分の「最も大切な夫」としてのイエスに忠誠を負っていたからです。中世の女性たちにとって、かしらとしてのイエスは夫の権威にまさることがありえました。時には女性たちが指導を担うことさえありえました。十二世紀の有名なスコラ学者ペトルス・アベラルドゥス（Peter Abelard）は、イエスに香油を注いだ女性についての聖書の物語（マタイ26:6-13、マルコ14:3-9、ルカ7:37-50）を論じています。アベラルドゥスは、「男ではなく女がキリストのかしらと結びつけられる」とき、彼女は「実際に彼を『キリスト』として任じている」と書いています。女性が自分に香油を注ぐのを許すことによって、イエスは男性の優位を取り消しています――彼は女性に、その時まで男性だけができたこと、すなわち王に油を注ぐことを許しているのです。ブレイマイアーズは、アベラルドゥスの議論を「からだを女性、かしら（頭）を男性とする慣習的な性別関係の驚くべき転換」と表現しています。アベラルドゥスにとって、女性によるイエスへの油注ぎは「命名」である、とブレイマイアーズは書いています。「聖なる方の中の聖なる方に油を注いでキリストとするのは、この女性なのである。」もっと多くのことを言うこともできますが、要点はこうです。福音派が男性のかしらであることに取りつかれているにもかかわらず、過去と現在のキリスト者たちは、それほど確信を持っていませんでした。教皇ヨハネ・パウロ2世の1988年の使徒的書簡（「Mulieris dignitatem」）における姿勢は、その良い例です。彼は、結婚における男性の優位と女性の服従を正当化するためにエペソ5章のパウロの文書を用いることは、奴隷制を正当化するためにこれらの箇所を用いることと同じだろう、と示唆しています。

パウロが妻の服従を強調しようとしたことは一度もなかったから

それでは、妻の服従について話しましょう。これは福音派が新約聖書の家庭訓から導き出している考えです。すでに見たように、歴史的な文脈は、妻の服従がパウロの文書の目的ではなかったことを示しています。家庭訓においてもそうです。もしパウロが家庭訓を取り入れたのが、キリスト者にローマ帝国の性別の階層にどう従うべきかを指示するためではなく、ローマ的な環境の中で違った生き方をするよう教えるためだったとしたらどうでしょうか。もし家庭訓が、女性にとっての新約聖書の「恐怖のテキスト」としてではなく、ローマの家父長制への抵抗として読めるとしたらどうでしょうか。

額面どおりに受け取ると（「素朴で字義どおりの解釈」として）、家庭訓はローマの家父長制的構造を神聖化しているように見えます。すなわち、妻、子ども、奴隷に対するパテルファミリアス

（paterfamilias、夫／父）の権威です。コロサイ3章のテキストはそれをよく示しています。「妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。夫たちよ。妻を愛しなさい。妻に対して辛く当たってはいけません。子どもたちよ。すべてのことについて両親に従いなさい。それは主に喜ばれることだからです。父たちよ。子どもたちを苛立たせてはいけません。その子たちが意欲を失わないようにするためです。

奴隷たちよ。すべてのことについて地上の主人に従いなさい。人のご機嫌取りのような、目先だけの仕え方ではなく、主を恐れつつ、真心から従いなさい」（コロサイ3:18-22）。

ローマの家父長制についてあまりご存じない場合のために言えば、男性による後見はローマ法でした。妻は法的に夫の権威に従わなければなりませんでした。未婚の女性は、父親や最も近い男性の親族の権威に従わなければなりませんでした。女性は財産を所有することも、独立して事業を営むこともできませんでした。女性は、男性が彼女の名において行動しなければ、法的・金銭的な取引を行うことができませんでした。この歴史的観点から見れば、一世紀のローマのテキスト（新約聖書）の中に、一世紀のローマ世界における妻たちの生活の現実を反映した、妻たちについての議論が見いだされるのは驚くことではありません。妻は夫に従うべきだというパウロが取り入れた指示は、まさにローマ世界が期待していたことなのです。

現代の福音派である私たちには、このことがどうしてもわかりません。

パウロは最初のキリスト者たちに、ほかの皆と同じようであれと言ったのではありません。キリスト者として違っていなければならないと言ったのです。レイチェル・ヘルド・エヴァンズ（Rachel Held Evans）は、キリスト教の家庭訓を、ローマの家父長制の「イエス・リミックス」と表現しています。学問的な研究も、リミックスという言葉がふさわしい表現であることを示唆しています。たとえば新約学者のキャロリン・オシエク（Carolyn Osiek）とマーガレット・マクドナルド（Margaret MacDonald）は、エペソ人への手紙の家庭訓に組み込まれている倫理的な教えはギリシア・ローマ世界とあまりに「対照的」なので、順応のしるしであるどころか、「家庭訓は、信者たちを最終的に際立たせるものとして示されている」と論じています。正しく読むなら、家庭訓は、シーミン・ルー（Shi-Min Lu）が書いているように、女性たちを解放するだけでなく、家のすべての成員をローマ世界の「抑圧的な要素」から解放するのです。パウロはキリスト者たちにローマの家父長制を押しつけたのではありません。パウロはイエス・リミックスを用いて、福音がどのように彼らを自由にするかをキリスト者たちに伝えたのです。

では、パウロにおける二つのよく似た家庭訓の箇所の、イエス・リミックスを見てみましょう。

［コロサイ3:18-19］**妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。夫たちよ。妻を愛しなさい。妻に対して辛く当たってはいけません。**

［エペソ5:21-22、25、28、33］**キリストを恐れて、互いに従い合いなさい。妻たちよ。主に従うように、自分の夫に従いなさい。 … 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。… 同じように夫たちも、自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。… それはそれとして、あなたがたもそれぞれ、自分の妻を自分と同じように愛しなさい。妻もまた、自分の夫を恐れ敬いなさい。**

現代のキリスト者である私たちは、すぐに男性の権威を聞き取ります。妻たちよ、夫に従いなさい。しかしパウロの最初の聞き手であった一世紀のキリスト者たちは、すぐにその反対を聞き取ったことでしょう。夫たちよ、妻を愛し、決して辛く当たってはいけない。夫たちよ、キリストが教会を愛し、そのためにご自分を献げられたように、妻を愛しなさい。キリスト教の家庭訓の重点は、今日ではもはやローマ世界におけるのと同じではないのです。

たとえば、紀元前四世紀の哲学者アリストテレス（Aristoteles）を取り上げてみましょう。アリストテレスは『政治学』の中で、西洋文化において最も影響力のある家庭訓のテキストの一つとなるものを書きました。彼が何と言ったか聞いてください。

家政については、三つの部分があることを私たちは見た――一つは奴隷に対する主人の支配……、もう一つは父の支配、そして三つ目は夫の支配である。夫であり父である者は、すでに見たように、妻と子どもを支配する。両者とも自由人であるが、その支配は異なっている。子どもに対する支配は王的な支配であり、妻に対する支配は国制的な支配である。なぜなら、自然の秩序には例外があるとしても、男は本性上、女よりも支配するのに適しているからである。……［男と女の間の］不平等は永続的である。……男の勇気は命じることに表れ、女の勇気は従うことに表れる。……すべての階層は、それぞれ固有の性質を備えたものと見なされなければならない。詩人が女について言うように、「沈黙は女の誉れである。しかしそれは男にとって同じように誉れではない。」

違いが聞き取れるでしょうか。アリストテレスは特に男性に向けて、彼らがどのように支配すべきか、またなぜ彼らには支配する権利があるのかについて書いています。彼は下にいる者たちを会話に加えていません。家政はローマの男性――主人、父、夫としての――の領域です。ことばは男性だけに向けられています。

それとは対照的に、キリスト教の家庭訓は、家の教会のすべての人――男性、女性、子ども、奴隷――に語りかけています。誰もが会話に加えられているのです。神学者ルーシー・ペピアット（Lucy Peppiatt）は、これがキリスト教によるローマの家父長制の切り崩しの「鍵」であると書いています。キリスト教の家庭訓は、男性の家長による後見を前提とするのではなく、ローマの家のすべての成員に向けられているので、「男性、女性、奴隷、子どもに認められていた通常の位置と、彼らに課されていた期待との転覆を、それ自体のうちに含んでいる」のです。キリスト教の家庭訓は、自分の家の人々のために語り行動する一人の男性に権威を与える代わりに、家の共同体のすべての成員――キリストへの信仰によって互いに結ばれている――に、自分自身で聞き、行動する権利を与えています。これはローマの家父長制的構造との根本的な違いです。家の教会というキリスト教の構造は、ローマ帝国の家父長制的な世界に抵抗しているのです。

パウロが男性の権威を際立たせようとしたのではなかったから

キリスト教の家庭訓が男性の権威を形づくっている仕方もまた、ローマの家父長制への異議として読むことができます。アリストテレス（Aristoteles）は男性の権威を正当化するために書きました。彼は男性と女性の間の永続的な不平等を強調しました。命じることが男性の本性であり、従うことが女性の本性だというのです。キリスト教の家庭訓は違うことをしています。コロサイ人

への手紙3章でパウロは、家についての指示を、まず妻たちへの呼びかけで始めています――（アリストテレスがするように）おそらく決定権を持っていた男性に向けてではありません。ペピアット（Peppiatt）もスコット・マクナイト（Scot McKnight）も、パウロが男性の力と権威を強調していないことを強調しています。むしろパウロが強調しているのは、妻たちが主にある者にふさわしく（彼女たちが劣っているからではなく）従うべきこと、そして夫たちが妻を愛し、辛く当たってはならないことです。「妻への指示を、階層の中での夫の権威、力、指導、あるいは地位に根拠づける代わりに」とマクナイトは書いています。「その根拠は根本的に異なっている。それは主の生き方に根拠づけられているのである。」キリスト教の家を導くのは、ローマの**パテルファミリアス（paterfamilias）**ではなく、イエスなのです。

同様に、エペソ人への手紙5章も、ローマの家父長制への抵抗として読むことができます。多くの学者は、パウロが家庭訓についての議論全体を21節のもとに置いていると論じています。「キリストを恐れて、互いに従い合いなさい。」エペソ人への手紙の家庭訓の冒頭でこの節を読むなら、それはすべてを変えます。そうです、妻たちは従うべきです。しかし夫たちもそうなのです。エペソ5章は、女性の劣等性を強調する代わりに、女性の平等を際立たせています――21節で夫たちが従うよう求められているのとまったく同じように、22節で彼女たちも従うよう求められているのです。キリスト者を、（女性の服従が強調される）ローマの大衆のもう一つの部分にするのではなく、21節の互いに従い合うことは、「信者たちを信仰のない世から区別する生き方の特徴」なのです。

その急進的な含意のゆえに、補完主義の（階層的な）見解を維持しようとする聖書翻訳では、21節は22節から切り離されなければなりません。[3] 英語標準訳（English Standard Version、ESV）は、21節を、翻訳者たちが「Walk in Love」と題した段落の終わりに置いています。それによって21節は、「妻と夫」という見出しのついた次の段落の始まりから切り離されます。その段落は22節から始まります。「妻たちよ、主に従うように、自分の夫に従いなさい。」このようにしてESVは、22節の女性の服従を際立たせることを選び、それを21節におけるパウロのローマ家父長制の切り崩しから文字どおり切り離しているのです。

ESVの翻訳者たちがエペソ5章でしたことは、古典期ギリシアのアテネの男性たちについての、考古学者イアン・モリス（Ian Morris）の批判を私に思い起こさせます。考古学者たちが古代アテネの女性についての物的証拠をほとんど見つけられないのは偶然ではない、とモリスは書いています。「女性と奴隷は目に見えないままである」。しかしそれは「方法論上の問題」や、研究者による証拠の誤った帰属のためではありません。ギリシアの都市国家の「異常なほど浸透した男性市民の文化」は、女性を服従させただけでなく、女性たちが暮らしていた空間をあまりにうまく支配したので、彼女たちの痕跡はほとんど残っていないのです。女性たちが目に見えないままなのは、「アテネの男性市民たちがそう望んだから」です。ESVによるエペソ5章の翻訳では、女性の服従が際立たせられ、夫たちに従うよう求める呼びかけは軽く扱われています――パウロがそう意図したからではなく、補完主義のESVの翻訳者たちがそう望んだからです。

エペソ5章21節は、この章におけるローマ家父長制の唯一の急進的な逆転ではありません。パウロはまた、男性が自分のからだを愛するように妻を愛するよう求めています。ギリシア・ローマ世

界では、女性のからだは不完全で奇形の男性のからだと見なされていたことをご存じでしょうか。アリストテレスは著作『動物発生論』の中で、「女性的なものは、いわば奇形の男性的なものである」と書き、また「女性の本性はより弱く、より冷たいので……私たちは女性の状態を、いわば一種の奇形と見なすべきである」と書いています。女性は文字どおり怪物だったのです。もちろんアリストテレスは、女性の奇形が「規則的な」、有益な現象であることを認めていました。紀元二世紀のガレノス（Galen）もまた、女性は、生殖器を外へ押し出す熱を欠いた、不完全な男性であると説明しました。しかしアリストテレスと同じように、彼も、奇形の男性がいるのは良いことだと認めました。そうでなければ生殖は不可能だっただろうからです。

それとは対照的に、パウロは女性のからだに対するこのような軽蔑を少しも示していません。彼は、男性のからだが女性のからだより価値があるわけでも、尊いわけでもないと宣言しています。女性も男性と同じように「聖なる、傷のない」者でありうるのであり、男性は自分の男性のからだを愛するのとまったく同じように、女性のからだを愛すべきなのです（エペソ5:27-29）。私は学生たちに、パウロを学ぶなら、キリスト教には「男性的な性格」があるというジョン・パイパー（John Piper）の主張がいかにたやすく論駁されるかを話します。パウロは自分の男性としての権威を誇るだろうと思うかもしれませんが、彼はそうしません。ビヴァリー・ロバーツ・ガヴェンタ（Beverly Roberts Gaventa）が明らかにしたように、パウロは手紙の中で七回、自分が設立にかかわった教会との関係を表すために母のイメージを用いています。「統計的に見れば、これはパウロが父のイメージよりも母のイメージを頻繁に用いていることを意味する。これは印象的なことであり、とりわけパウロ書簡についてのほとんどの議論の中でそれが事実上まったく登場しないことを考えるとなおさらである。」パウロは自分自身――男性の使徒――を、身ごもった母として、産みの苦しみをする母として、さらには乳を飲ませる母として描いています。

パウロは女性のからだを価値あるものと考えているだけでなく、「自分に恥をもたらす役割、すなわち女性と同一視された男性という恥をもたらす役割のために、家長の権威を手放す」こともいといません。パウロのメッセージは何と美しく、何と急進的でしょうか！ 彼のことばが一世紀の教会の女性たちにとってどれほど歓迎すべきものであったか、私には想像もつきません。ローマ世界で女性のからだを弱いものとしていたものが、パウロの文書では、それを強いものとしたのです。女性の文学的な姿をとることによって、パウロは、キリストにあっては「もはや男と女はない」という、ガラテヤ3:28の彼自身のことばの急進的な主張を体現したのです。

中世のキリスト者たちは、現代のキリスト者たちがしない仕方で、パウロの母のイメージを取り上げました。ガヴェンタは、パウロの驚くべき母のイメージに注目した現代の学者はほとんどいないと述べています。それとは対照的に、歴史家キャロライン・ウォーカー・バイナム（Caroline Walker Bynum）は、十二世紀の男性聖職者たちが用いた母のイメージの頻度にあまりに感銘を受けたので、画期的な研究『Jesus as Mother: Studies in the Spirituality of the High Middle Ages』を書きました。「私が問いたいのは」と彼女は書いています。「通常は男性として描かれる神とキリストを描写するために、明示的で詳細な母のイメージを用いることが、なぜ十二世紀のシトー会修道士の間でこれほど好まれたのかということである。」彼女は、女性に対する態度においてはむしろ家父長的であったベネディクト会修道士、カンタベリーのアンセルムス（Anselm von Canterbury）を、パウロの母のイメージを取り上げた最初の中世の聖職者の一人として挙げてい

ます。テサロニケ第一2:7とガラテヤ4:19のパウロの文書にはっきりと倣って、アンセルムスはこう書いています。「あなた［パウロ］は、キリスト者たちの間で、自分の子どもたちの世話をするだけでなく、その驚くべき愛の配慮によって彼らを二度目にこの世に生み出す乳母のようです。」現代の福音派がパウロの急進的な母のイメージの用い方を見落としているからといって、それが存在しないということにはなりません。それはただ、私たちがまたしてもパウロを誤解してきたということを意味するだけです。

パウロの関心はローマの性別の階層にはなかったから

家庭訓はローマの家父長制への一種の抵抗として読まれるべきだと私に確信させるもう一つの証拠は、初期のキリスト者たちがローマ世界からどのように見られていたかということです。すなわち「性別の逸脱者」としてです。オシエク（Osiek）とマクドナルド（MacDonald）は、小プリニウス（Plinius der Jüngere）が、彼が女性執事と呼んだ二人のキリスト者女性への拷問について論じた後、キリスト教を「堕落した、度を越した迷信」と呼んだことを思い起こさせてくれます。二人はこう書いています。「男性の指導者への言及を排除して、グループ内の一種の女性の指導に注意を向けることによって、プリニウスは、男らしさの理想が危険にさらされていることをほのめかした。女性たちが支配権を握っていたのである。」そしてそれは、ローマの観点からは恥ずべきことでした。初期のキリスト者たちは、女性を指導的な役割に就かせただけではありませんでした。彼らはまた、伝統的に女性の空間であった家という私的な領域で、対等に――男性、女性、子ども、奴隷が――集まっていました。キリスト教は、ローマの男らしさの理想を切り崩すものと見なされたために、規範から外れた不道徳なものとされたのです。プリニウスがキリスト教を嫌ったのは、それがローマの家庭訓に従っていなかったからです――それに従っていたからではありません。

多くの現代のキリスト者にとって、家庭訓は私たちをこの世から区別するものです。多くの人が信じているように、周りでフェミニズムが混沌として荒れ狂う中、福音派の教会は、流れのほとりに植えられた手入れの行き届いた木のように――枝の階層を備え、しっかりと落ち着いて――立っています。実際、それはジョン・パイパーとウェイン・グルーデム（Wayne Grudem）が『Recovering Biblical Manhood and Womanhood』の中で述べているとおりです。序論で彼らはこう書いています。「私たちは、神が創造されたとおりの男らしさと女らしさについての崇高なビジョンを、キリスト者たちが取り戻す手助けをしたい。……私たちは、この新しいビジョン――聖書的な『補完性』のビジョン――が、以前の誤りを正すとともに、神から与えられた性別の違いをフェミニズムがぼかしてしまうことから生じる反対方向の誤りをも避けることを願っている。」ただ、一世紀のパウロの世界は、ローマの性別の階層を「新しいビジョン」とは見なさなかったでしょう。パウロの家庭訓に反映されているローマの家父長制的構造は、「新しいビジョン」ではありませんでした。**パテルファミリアスの力を認めることは、ローマ世界がすでにしていたことでした。家父長制は、キリスト者を違ったものにするものではありませんでした。それは、彼らを他のすべての人と同じにするものだったのです。**

新約聖書の家庭訓は、初期の教会が、キリスト教的でない、ますます敵対的になっていく世界の中で、どのように生きようとしたかについての物語を語っています。彼らは溶け込まなければなりませんでしたが、同時にキリストの福音を高く掲げなければなりませんでした。彼らはローマの家父長制の枠組みをできるかぎり維持しなければなりませんでしたが、同時に、神のかたちに造られたすべての人の価値と尊厳を高く掲げなければなりませんでした。パウロは彼らに、ローマの家父長制のリミックスのための設計図を与えたのです。キリスト教の家庭訓は、男性を第一の権威として語りかける代わりに、すべての人を会話に加えています。男性の権威を女性の劣等性によって正当化する代わりに、キリスト教の家庭訓は、女性が男性と同等の価値を持つことを確認しています。妻の服従に焦点を当てる（それは誰もがしていたことです）代わりに、キリスト教の家庭訓は、夫に、ローマ法が許していたこととまさに正反対のことをするよう求めています。すなわち、妻のいのちに対して力をふるうのではなく、妻のために自分のいのちを犠牲にすることです。それこそが「キリスト教の革命」だとペピアットは書いています。それこそが、キリスト者を私たちの周りの世界から区別するものなのです。

私たちはパウロをまさにあべこべに理解してきたのではないでしょうか。**もし彼の焦点が、かしらとしての男性と女性の服従に置かれたことなど一度もなかったとしたらどうでしょうか。もし彼のビジョンが、私たちが想像してきたよりも大きなものだったとしたらどうでしょうか。もしパウロが、古代の性別の階層を写し取る代わりに、キリスト教の福音がローマの家さえも解放することを私たちに示そうとしていたとしたらどうでしょうか。**

数年前、私の夫は、私たちの高校生の若者たちの多くと一緒に、町の外の修養会に出かけていました。普段、青少年の日曜学校――その週末に修養会に行かなかった子どもたち全員が属していました――を教えていた男性が、病気で休むと連絡してきました。手が空いているのは私だけでした。私にとってはそれで構いませんでした。私は教えることが大好きですし、その頃の私は自分の力の絶頂期にありました。毎週私は、ベイラー大学で六つの学部生のクラスを教えていただけでなく、水曜日の夜には高校生の女の子たちを教え、さらにメンターとして会っていた大学院生、学部生、若者たちも教えていました。教えることは、たとえ即興であっても、私にとって第二の天性になっていました。

しかし私たちの教会の指導者たちは、女性は男性を教えてはならない、以上、ということをはっきりさせていました。そして彼らにとって、男性であることは十三歳から始まっていました。ですから私は牧師に電話しなければなりませんでした。状況を説明し、十代の男の子と女の子でいっぱいの教室で男性の教師の代わりを務めることができるよう、特別な許可を願い出なければなりませんでした。長い沈黙の後、私が前の週の説教についての質問を順にたどり、教師としてではなく司会者として振る舞うだけなら構わない、と告げられました。ただ「ありがとうございます」と言って電話を切るのに、私はありったけの自制心を必要としました。

その一部は私のプライドだったに違いありません。大きな研究大学で博士号を取った教授である私が（私の第二の専門分野は宗教学です）、高校生の日曜学校を教えることはできないと言われたのです。ええ、それは私のプライドを傷つけました。しかし、それだけが私が腹を立てた理由ではありませんでした。私が、その牧師が間違っていると信じていたからでもあります。**私が教える**

ことを許されなかったのは、パウロが女性たちに、黙っていて男性の上に権威をふるってはならないと言ったと、彼が信じていたからです。もしパウロがそんなことを一度も言っていなかったとしたらどうでしょうか。もし私たちが、家庭訓の場合とまったく同じように、パウロのローマ的な文脈を忘れてしまったために、パウロを単に誤解してきたのだとしたらどうでしょうか。もし私たちが、周りの異教世界に対するパウロの反駁を、パウロ自身のことばと取り違えてきたのだとしたらどうでしょうか。

パウロは女性たちに黙っているようにとは言わなかったから

私は歴史家なので、パウロの手紙にはそのことばが言い表している以上のものがあることを知っています。パウロは、自分がよく知っている教会に宛てて書きました。彼は彼らを知っていたのです。「これらの問いは無から生じるのではない」と、ガヴェンタはコリント人への手紙第一に関して私たちに思い起こさせています。パウロは、その闘いも、人々も、問題を起こす者たちも知っていました。パウロのメッセージの基本を理解するために、歴史に深く分け入る必要はありません。（一つの例として）コリントの教会の中で、さまざまな霊的賜物の価値をめぐって競い合いが生じていたことは見て取れます。誰が高慢になっていたのか、誰が異言よりも預言を好んでいたのかといった細部を直接知ることはできないかもしれませんが、パウロが彼らをどのように正したかはわかります。彼らの賜物はすべて同じ御霊から来ており、彼らの賜物はすべて同じからだの中で働き、彼らの賜物のどれ一つとして単独で働くものではない、ということです。私たちはパウロのメッセージをはっきりと聞き取ります。キリストのからだにおいて、私たちは皆等しく大切なのです。二千年以上の隔たりも、その意味を曇らせはしません。

それでも、パウロの手紙の歴史的な文脈を無視するなら、私たちは彼の意味をゆがめ、彼のもぐら塚を山に変えてしまいかねません。その格好の例がコリント第一14:33-36です。「聖徒たちのすべての教会で行われているように、女たちは教会の集まりでは黙っていなさい。彼女たちは語ることを許されていません。律法も言っているように、従いなさい。もし何かを学びたければ、家で自分の夫に尋ねなさい。教会の集まりで語ることは、女にとって恥ずかしいことなのです。それとも、神のことばはあなたがたのところから出たのでしょうか。あるいは、あなたがたのところにだけ伝わったのでしょうか。」

パウロは、女性は黙っていて、従い、夫の霊的な権威に頼るべきだと説明しています。本当にそうでしょうか。この箇所は現代の福音派にとって大きな山となり、私の考えでは、パウロがかつて意図したよりも強く強調されています。それは補完主義の教えの基本テキストとなってきました。ローマの歴史をよりよく理解することが、この区分の解釈の仕方をどのように変えうるかを見てみましょう。

紀元前215年、敗北し資金に窮したローマは、新しい法律を可決しました。その背景には、ローマ史上最大の軍事的敗北がありました。その一年前の8月2日、カルタゴの将軍ハンニバル（Hannibal）が、第二次ポエニ戦争においてカンナエでローマ軍を壊滅させたのです。史料によれば、その日、五万人から七万人のローマ兵が死にました。これは第二次世界大戦の最も血なまぐさい戦いのいくつかよりも多い数です。一世紀のローマの歴史家リウィウス（Livius）は、「確

かに、これほどの不運の重荷の下で崩れ落ちなかった国民は他にないであろう」と叫びました。ただ、ローマは他の国民とは違っていました（そしてまさにそれこそがリウィウスの言いたいことでした）。ローマは崩れ落ちませんでした。ローマ人たちはベルトを締め直し、新しい軍隊を編成し、戦い続けました。ローマは不屈の決意の権化だったのです。

私の学生たちは、私が純粋な軍事史を好まないことを知っています。ですから私がこのような話を始めると、まもなく女性たちが登場することを彼らは知っています。そして実際に登場します。ローマの緊縮策は、増えつつあった、独立した裕福な女性たちのグループ――男性の後見人が突然減ったことによって利益を得た妻や娘たち――への厳しい取り締まりにつながりました。ローマがそうしたのには、おそらく二つの理由がありました（歴史家たちは今もそれについて議論しています）。一つの理由は確かに戦争遂行の努力でした。ローマはすべての人からのお金を必要としていました。そこで彼らはオッピウス法を可決しました。女性たちは、もはや贅沢な服装をすることも、特別な機会を除いて（ローマ市内で）馬車に乗ることも、半オンス以上の金を所有することも許されなくなりました。中には戦時中の相続財産を国家に引き渡さなければならない者さえいました。これらの女性たちは、ローマのためにより多くのお金を使い、自分のためにはより少なく使うよう求められたのです。

ローマがオッピウス法を制定したおそらく二つ目の理由は、女性たちによる富の公の誇示を制限することでした。カンナエの戦いの後、ローマは喪に服していました。パーティーを開いたり、おしゃれな服を着たりする時ではありませんでした。守りを固め、死ぬまで戦う時でした（そして彼らは、おおむねそうしました）。とりわけ、女性が男性よりも多くのお金を持つような時ではありませんでした。すでに見たように、ローマは家父長制の社会でした。そしてローマの既婚婦人――夫の後見の下にある既婚女性――は、ローマ社会の成功の象徴でした。男性の指導から自由な、独立した裕福な女性たちは、そうではありませんでした。

ちなみに、ローマは勝ちました。

しかし危機が過ぎ去った後も、女性の富を制限する法律はそのまま残り、一方で男性の富を制限する法律は廃止されました。紀元前195年ごろ、ローマの女性たちはもううんざりしていました。彼女たちは抗議し、通りを、さらにはフォルムへの道までもふさいで、法律の廃止を要求しました。

執政官の一人、大カトー（Cato der Ältere）は、法律の廃止に反対しました。彼が何と言ったか聞いてください。そして、リウィウスがおそらくカエサル・アウグストゥス（Caesar Augustus）の治世（紀元前27年から紀元14年）の間に彼の演説を書き留めたことを心に留めておいてください。

家では私たちの自由が女たちの狂乱に打ち負かされ、ここフォルムではそれが踏みにじられている。私たちが一人ひとりを抑えておかなかったために、今や彼女たち全員をまとめて恐れているのだ。……実際、私は最近、女たちの群れの真ん中を通り抜けたとき、顔を赤らめた。……私はこう言うべきだったのだ。「これはいったい何という振る舞いか。人前を走り回り、通りをふさぎ、他の女たちの夫と話をするとは！ 家で自分の夫に同じことを尋ねることはできなかったのか。あなたがたは、家で自分の夫に対するよりも、人前で他人の夫に対するほうが愛想がよいの

か。とはいえ、ここでどんな法律が可決されたり廃止されたりするかに気をもむことは、家においてさえ、あなたがたにふさわしくないのだが。」私たちの先祖は、女たちがいかなる事柄も――私的な事柄でさえ――後見人なしに行うことを望まなかった。彼らは女たちが、親や兄弟や夫の権威の下にあることを望んだ。ところが私たちは（神々よ、助けたまえ！）、今や彼女たちに政治を求めさせ、フォルムや私たちの集会に口を出させてさえいる。彼女たちが今、通りや辻で何をしているのか。護民官たちを説得して、廃止に賛成票を投じさせようとしているのでなくて何であろうか。……もし今彼女たちが勝利すれば、彼女たちは何を試みないであろうか。彼女たちがあなたがたと対等になり始めるやいなや、彼女たちはあなたがたにまさる者となるであろう。

リウィウスはカトーのこの演説を、自らのローマ史の中に書き留めました。一世紀の終わり近くに書いた小プリニウスは、リウィウスを有名人として描いています。リウィウスは人気のある著述家であり、彼の歴史書は非常によく知られていたことでしょう。ですから歴史家として、私は、リウィウスの響きが新約聖書の中に現れることに驚きません。もう一度コリント第一14:34-35を聞いてください。「女たちは、教会では静かにしていなさい。彼女たちは語ることを許されていません。律法も言っているように、従いなさい。何かを知りたいと思うなら、家で自分の夫に尋ねなさい。教会で語ることは、女にとって恥ずかしいことなのです。」いいえ、これはまったく同じことばではありません。しかし、非常に近いものです。明らかな反響です。言い換えれば、パウロはここで、自分のローマ的な環境から汲み取っているのです。

カトーの演説は、女性についてのこの見方を表している唯一のローマのテキストではありません。新約学者のチャールズ・タルバート（Charles Talbert）は、ユウェナリス（Juvenal）（紀元二世紀初め）もまたその『諷刺詩』第6歌の中で、家にとどまる代わりに人前を歩き回り、男性の政治に口を出す女性たちを非難していることを、私たちに思い起こさせています。ローマ世界は、女性を男性に従属するものと見なしていました。ローマ世界は、女性が人前を歩き回るのではなく、男性が家で妻に情報を伝えるべきだと明言していました。ローマ世界は、公の場で女性に黙っているよう命じていたのです。

パウロは教養あるローマ市民でした。彼は、誤った理解を引用し、それから反駁することによって正すという、当時一般的だった修辞上の手法をよく知っていたはずです。パウロはコリント第一6章と7章で、「すべてのことが私には許されている」「食物は腹のためにあり、腹は食物のためにある」「男が女に触れないのは良いことだ」という引用によって、まさにそれを行っています。これらの場合、パウロは「すべてのことが私には許されている」のような、異教世界の誤った見方を引用しています。そしてパウロはそれを大きく修正するのです。パウロは、女性は人前では黙っていて、家で夫から知らせを受けるべきだというリウィウス（Livius）の見方を含め、女性についての同時代の見方をよく知っていたことでしょう。ペピアット（Peppiatt）が論じてきたように、パウロはコリント第一11章と14章で、コリント第一6章と7章と同じことをしている可能性はないでしょうか。悪い慣習を引用し、それから正すことによって、その悪い慣習を反駁しているのではないでしょうか。ペピアットはこう書いています。「コリント人への手紙における女性に対する禁止は、パウロの教えに反して、コリント人たちが自分たち自身の文化的な期待と価値観に従って女性をどのように扱っていたかを示す例である。」

もしパウロが、コリントのキリスト者たちが自分たち自身の文化的な制限を女性たちに課していることをあまりに憂慮したので、それを彼らに指摘したのだとしたらどうでしょうか。彼は、コリントの男性たちがローマ世界から自分たちのキリスト教の世界へと引き込もうとしていた悪い慣習を引用し、それからそれに立ち向かったのです。改訂標準訳（Revised Standard Version、RSV）は、パウロがまさにそうしたという見方を支持しています。パウロはまず文化的な制限を示します。「聖徒たちのすべての教会で行われているように、女たちも教会では黙っていなさい。彼女たちは語ることを許されていません。律法も言っているように、従いなさい。何かを知りたいと思うなら、家で自分の夫に尋ねなさい。教会で語ることは、女にとって恥ずかしいことなのです」（コリント第一14:33-35）。そしてパウロが割って入ります。「何ということか！ 神のことばはあなたがたから出たのですか。それとも、あなたがただけに伝わったのですか。自分を預言者、あるいは御霊の人だと思う人は、私があなたがたに書いていることが主の命令であると認めなさい。もしこれを認めないなら、その人は認められません。ですから、私の兄弟たち、預言することを熱心に求めなさい。また、異言で語ることを禁じてはいけません。ただし、すべてのことを適切に、秩序正しく行いなさい」（36-40節）。

私は授業で、よくこれを演習として行います。一人の学生に、自分の聖書翻訳――たいていはESVかNIV――から読んでもらいます。それから私がRSVから、ことばをしかるべく強調しながら読み上げます。そして私が「何ということか！ 神のことばはあなたがたから出たのですか」と声を上げると、たいていクラス全員が息をのむのが聞こえます。一度、ある女子学生が大きな声で叫びました。「バー先生！ それならすべてが変わってしまいます！」 そうです、と私は彼女に言いました。そのとおりです。

コリント第一14:34-35を、コリントの慣習を示す引用として読むなら（D・W・オデル＝スコット（D. W. Odell-Scott）が1983年に、チャールズ・タルバート（Charles Talbert）が1987年に［ドイツ語訳者注：トーマス・シルマッハー（Thomas Schirrmacher）も1991年に、キャサリン・ブッシュネル（Katharine Bushnell）はすでに100年前に］、そして最近ではペピアットが再びそう論じています）、パウロの意図は明らかであるように思われます。すなわち、コリント人たちがしていたこと（「女たちは黙っていなさい」）を区別し、キリスト者はコリントの慣習に従うべきではないことをはっきりさせること（「何ということか！」）です。パウロがしたのがそれだと保証することはできませんが、それは（歴史的に）非常に筋が通っています。コリント人への手紙第一にはすでに、パウロのものではない引用がいくつも含まれていますし、34-35節の文言はローマの史料に驚くほど近いのです。マーグ・モウチコ（Marg Mowczko）はこう述べています。「14章34-35節がパウロのものではない引用だという見方は、34-35節が本文にもたらす口調の唐突な変化と、それに続く36節での主題、口調、そして性の唐突な変化について、もっともらしい説明を与える数少ない見方の一つである。」もしパウロが実際に、キリスト教の世界観を対置するためにローマの世界観を引用しているのなら、彼の意味は、福音派の女性たちが教えられてきたこととまさに正反対なのです。

パウロは、ローマ世界がしていたように女性たちに黙っているよう言うのではなく、実はイエスの世界では女性たちが語ることを許されていたのだと、男性たちに言おうとしていたのではないでしょうか。私たちは（またしても）パウロの言わんとしていたことを見落としてきたのではない

でしょうか。彼の叱責を心に留めて女性たちに語ることを許す代わりに、私たちは、パウロが非難したまさにその家父長制的な慣習を続けているのではないでしょうか。

歴史家として、パウロのことばが、彼が生きていたギリシア・ローマ世界にどれほど似ているかを無視するのは、私には難しいことです。しかし、たとえ私が間違っていて、パウロが反駁の目的で意図的にローマの史料を引用しているのではなく、ただそれに頼っているだけだとしても、パウロがコリントの女性たちに与えた指示は、その歴史的な文脈に限定されると、私はなお主張するでしょう。なぜでしょうか。矛盾がないこと（つまり、章全体、手紙全体、そして新約聖書全体の言明が一致していること）は、良い解釈の美徳だからです。パウロは、女性は黙っていなければならないという包括的な命令を出してはいません。彼はすべての手紙において、女性が語ることを許しています（コリント第一11:1-6はその良い例です）。パウロは女性の指導を制限していません。彼自身が私たちに、初期の教会で女性たちが指導していたこと、そして自分が彼女たちの奉仕を支持していることを語っています（ローマ16章については次の節で論じます）。硬直した性別の階層を固定することは、単にパウロの関心事ではないのです。ビヴァリー・ロバーツ・ガヴェンタ（Beverly Roberts Gaventa）が、コリント人への手紙第一のより前の箇所（12:1-7）に関して私たちに思い起こさせているように、パウロの「奉仕への召しは性別によって制限されておらず、そのため補完性についての議論はここに何の根拠も見いださない」のです。**パウロが女性たちに黙っているよう命じたと主張することによって、福音派はまたしても家父長制の文化に降伏してしまいました。（レイチェル・ヘルド・エヴァンズ（Rachel Held Evans）がかつて私たちに勧めたように）アリストテレスを投げ捨てる代わりに、私たちは、パウロがあれほど私たちに与えようとしたキリストにある自由のほうを投げ捨ててしまったのです。**

パウロにおける聖書の女性たちは、私たちの聖書的女性像に従っていないから

最終的に私の考えを変えたのは、ローマ人への手紙16章のパウロの女性たちでした。

それがはっきりとわかった日曜日のことを、今でも覚えています。私は説教の後、心をかき乱されていました。あまりにかき乱されていたので、皿洗いをしていました。昼食の皿をこすり洗いしている間、流れる水が私の心を静めてくれました。夫は何かがおかしいと気づいていました（皿洗いは明らかなしるしでした）。彼は台所に入ってきました。彼は一言も言いませんでした。ついに私が口を開きました。「私は、男性がかしらだということを信じていないの。」彼は調理台にもたれかかりました。私は彼の顔を見ることができませんでした。さらに時間が過ぎ、それから彼は尋ねました。「男性が家庭の霊的な指導者として召されているとは信じていないということ？」 私は首を横に振りました。「ええ。」彼はもう一分ほどそこに立っていて、それからただ「わかった」と言って立ち去りました。彼がその点で私と同じ意見でないことはわかっていました――彼は補完主義の教会で育ち、補完主義の神学校で学んでいたのです。それでも彼は、耳を傾け、別の神学的な視点を考えてみる用意がありました。その日彼が私に示してくれた信頼に、私はいつまでも感謝しています。

実のところ、最後の一滴となったのはその説教ではありませんでした。もっとも、それが男性の指導についての説教だったことは覚えています。最後の一滴となったのは、私が最近、女性史の講座で行った講義でした。古代世界から中世へと年代順に進んでいく中で、私たちは初期の教会における女性について話していました。思いつきで、私は学生の一人に聖書を開いてローマ人への手紙16章を声に出して読むよう頼みました（キリスト教系の大学では、少なくとも一人の学生が聖書を手にしていることを常に当てにできます）。私はクラスに、よく聞いて、聞こえた女性の名前をすべて書き留めるよう求めました。

それは印象的な教育の瞬間でした――学生たちにとっても、私にとっても。女性たちがこれらの節を満たしていることは知っていましたが、彼女たちの名前が一つずつ声に出して読まれるのを聞いたことは、それまで一度もありませんでした。

フィベ。パウロの手紙を届け、自分の家の教会でそれを読み上げた女性執事。

プリスカ（プリスキラ）。夫の名前より先に名前が挙げられている（ローマ世界ではかなり注目すべきことです）、パウロの同労者。

マリア。アジアで福音のために精力的に働いた人。

ユニア。使徒たちの間で際立っている人。

トリファイナとトリフォサ。主にあってパウロと共に戦った女性たち。

愛するペルシス。彼女も主のために労苦しました。

ルフォスの母、ユリア、そしてネレウスの姉妹。

十人の女性がパウロによって称えられています。

七人の女性がその奉仕によって際立たせられています。フィベ、プリスキラ、マリア、ユニア、トリファイナ、トリフォサ、そしてペルシスです。一人の女性、フィベは女性執事と呼ばれています。ケヴィン・マディガン（Kevin Madigan）とキャロリン・オシエク（Carolyn Osiek）は、フィベは「私たちがその名を知っている、一世紀の教会の唯一の女性執事」であると書いています。もう一人の女性、ユニアは、単に使徒として特定されているのではなく、使徒たちの間で際立っている者として特定されています。

ローマ人への手紙16章では、男性よりも多くの女性がその務めによって特定されていることを知っていましたか、と私は学生たちに尋ねました。私たちは座って、これらの女性たちの名前を眺めました。「どうして？」と突然一人の女子学生が口をはさみました。彼女は講義にあまりに没頭していたので、手を挙げることさえしませんでした。「どうして私はこれまでこのことに気づかなかったのでしょう？」 おそらく、あなたが使っている英語の聖書翻訳が女性たちの働きをぼかしているからでしょう、と私は彼女に言い、さらに説明を始めました。

その日講義をしながら、私は自分自身の言うことに耳を傾けていました。英語の聖書翻訳が初期の教会における女性の指導的役割をどのように覆い隠しているかについて、証拠を示している自

分に耳を傾けていました。クラスと一緒にローマ人への手紙16章のさまざまな翻訳をたどっている自分に耳を傾けていました。

たとえば、1986年にムーディー・プレス（Moody Press）から出版された『Ryrie Study Bible』（ドイツ語訳でも入手できます）を取り上げてみましょう。私の祖父がこの聖書を持っていて、私は祖父のその一冊を自分の書棚に置いています。この聖書は、フィベを女性執事と認める代わりに、彼女の働きを「しもべ」と訳しています。その学習注を聞いてください。「ここで『しもべ』と訳されている語は、しばしば『執事』と訳され、そのためフィベが女性執事（ディーコネス）であったと考える人もいる。しかし、この語はここでは非公式な意味での助け手として用いられている可能性のほうが高い。」「気づきましたか」と私は学生たちに尋ねました。フィベの役割がなぜ「執事」ではなく「しもべ」と訳されるべきなのか、何の根拠も示されていません。なぜこの語がむしろ「非公式な意味での助け手」として用いられているのか、何の根拠も示されていません。その訳語が選ばれた理由は推測できます。フィベが女性だったからであり、それゆえ彼女は執事ではありえなかったと前提されているのです。もし「ケンクレアにある教会の執事」という表現が男性の名前の後に続いていたなら、「執事」の意味が疑問視されることなど決してなかっただろうと、私は本気で思います。

教えながら、私は自分の教会のことを考えていました。女性が壇上に現れるのは、歌うときか楽器を演奏するときを除いてめったにないことを。女性たちが子どもの礼拝を導き、男性たちが大人のための働きを担っていることを考えました。私が大人の日曜学校のクラスを教えるよう頼まれ、牧師が私の教材を確認しに来たときのことを考えました。私は教会史についてだけ教えていたので、彼はそれを私に許しました。もっとも、もし私が聖書のテキストを扱っていたなら、話は違っていたでしょう。

大学の教室の前に立ちながら、自分が偽善者のように感じたことを覚えています。

そこにいる私は、指導的立場の女性をめぐる問題はパウロではなく、問題は私たちがパウロをどのように誤解し、曇らせてきたかにあるという、説得力のある歴史的証拠を学生たちに示していました。 そこにいる私は、初期の教会で女性たちが、女性執事や女性使徒としてさえ、実際に指導し教えていたことを学生たちに示していました。私は彼らに示しました。ユニアは、ほとんど近代に至るまで女性使徒と見なされていましたが、やがて人々は彼女の名前を男性の名前、ユニアスと訳し始めたのです。新約学者のエルドン・ジェイ・エップ（Eldon Jay Epp）は、エラスムス（Erasmus）から二十世紀までのギリシア語新約聖書を網羅する二つの表を作成しました。二つの表を合わせると、ギリシア語の名前ユニアは、二十世紀に至るまでほぼ一貫して女性形で訳されていましたが、二十世紀になって突然、男性のユニアスとして訳され始めたことがわかります。なぜでしょうか。ガヴェンタはこう説明しています。「エップは、二十世紀におけるローマ16:7の扱いの重要な要因が、女性は使徒ではありえないという前提であったことを、痛ましく、また苛立たしい仕方で明らかにしている。」ユニアがユニアスになったのは、現代のキリスト者たちが、男性だけが使徒になれると前提したからです。歴史家として、私は、パウロの手紙の女性たちが、今日の教会指導者たちが女性に課しているいわゆる制限に当てはまらない理由を知っていました。それは、私たちがパウロを読み違えてきたからだと知っていました。パウロは女性の扱

いにおいて一貫性を欠いているのではありません。私たちが自分たちの解釈によって、彼を一貫性のないものにしてしまったのです。ローマ人への手紙16章が明らかにしているように、実際には、聖書の女性たちが、聖書的女性像についての現代の考えと食い違っているのです。

私はこのすべてを知っていました。それにもかかわらず、私たちの教会では女性は十三歳以上の男の子に教えてはならないと教会の指導者たちが主張したとき、私は彼らに反論しませんでした。私はなお黙っていたのです。

私は講義を続けました。フィベについても歴史的な現実は同じです、と私は学生たちに言いました。パウロは彼女を女性執事と呼んでいます。テキストそのものに異を唱える人はいません――人々が異を唱えることができるのは、テキストの意味だけです。フィベは、初期の教父たちによって、女性としても執事としても認められていました。たとえばオリゲネス（Origenes）は三世紀初めに、フィベの称号は「使徒的権威をもって」、「女性たちもまた教会の奉仕に任じられること、そしてフィベがケンクレアにある教会でその職に就けられたことを証明している。パウロは大きな称賛と評価をもって、彼女の立派な働きを数え上げてさえいる」と書いています。オリゲネスが「教会の奉仕」で何を意味していたのかについては確かに疑問を呈することができますが、オリゲネスがフィベに委ねられた役割を受け入れていたことは明らかです。一世紀後、「黄金の口」を持つ説教者ヨハネス・クリュソストモス（Johannes Chrysostomus）は、フィベが「他の誰よりも先に」言及され、「姉妹」と呼ばれ、「執事」として称えられたことが、彼女にとってどれほど大きな名誉であったかについて書きました。「男も女も」フィベを「聖徒」として「見習う」べきだ、とクリュソストモスは結論づけています。テモテ第一3:11についての説教の中で、クリュソストモスは、女性を男性とまったく同じように執事として理解していることをはっきりさせています。彼はこう書いています。「同じように、女たちも品位があり、中傷する者でなく、節度があり、すべてのことに忠実でなければならない。ある人々は、［パウロが］女性一般について語っていると言う。しかしそれはありえない。なぜ彼は、自分が語っていることの途中に、女性について何かを差し挟もうとするだろうか。むしろ彼は、執事の位にある女性たちについて語っているのである。『執事は一人の妻の夫でなければならない。』これは女性執事にもふさわしいことである。なぜなら、それは必要であり、良いことであり、正しいことだからである。とりわけ教会においては。」

四世紀の長老／司祭であり執事でもあった人物による、女性の指導へのこの開かれた理解に驚かれるなら、教会史家のマディガンとオシエクは、そうであるべきではないと私たちに思い起こさせています。「アンティオキアとコンスタンティノープルにおけるヨハネスの教会では」と彼らは書いています。「女性執事、すなわちディーコネスはよく知られていた。」フィベを女性執事と描写することは、クリュソストモスにとって不思議なことではありませんでした。四世紀の彼の親しい友人の何人かは女性執事だったからです。実際、マディガンとオシエクは、初期の教会における女性執事についての107の言及（碑文と文献）を見つけ出しています。

もちろん、初期の教会の誰もが指導的立場の女性を支持していたわけではありません、と私は学生たちに言いました。長老（プレスビテロス）の職は、古代世界の家父長制的な偏見がすでにキリスト教の中に忍び込んでいたことを示す明らかな証拠です。アリストテレスが女性のからだを

怪物的で奇形のものと見なしていたことを覚えていますか。教会の指導者たちはこうした考えを自分たちの会議の決議に持ち込み、すでに五世紀には、女性のからだは指導には不適格だと宣言していました。マディガンとオシエクが書いているように、「祭儀的な清さは男性と、汚れは女性と結びつけられている。これが女性の長老に反対する最大の論拠であった」のです。六世紀までに、教会がヨーロッパの地に広がり、ローマの権力の古い世俗的な座を司教と司祭という聖なる職に置き換えていったとき、女性たちもまた動いていました――ただし、男性の権威の下という、以前の場所へと戻る方向にです。

「バー先生、どうして教会ではこのことを教えてくれないのですか？」

私はその女子学生を見つめ、胸が締めつけられました。ほとんどの人は単に知らないのです、と私は言いました。神学校の教科書は、しばしば牧師たちによって書かれています――歴史家によってではなく（とりわけ女性の歴史家によってではなく）。補完主義の教会に通うほとんどの人は、ESVがユニアを「使徒たちの間で際立っている」ではなく「使徒たちによく知られている」と訳したことが、女性を指導から締め出すための意図的な一手であったことを知りません（ローマ16:7）。人々は、現代の教会で女性が指導から排除されているのとまったく同じように、初期の教会でも女性は指導から排除されていたと信じています。教会は、自分が真実だと思っていることを教えるのです。

これらが、私が声に出して言ったことでした。

私が言わなかったこと――そしてその日、流し台の前に立っていた私の目に涙をあふれさせたこと――は、私が真実を知っていたということでした。私は真実を知っていて、それでも自分の教会で黙っていたのです。私が黙っていたのは、夫が職を失うかもしれないと恐れていたからです。友人たちを失うことを恐れていました。私たちの奉仕を失うことを恐れていました。

補完主義は、ルールを守る女性に報いを与えます。黙っていることによって、私は夫が指導者であり続けられるよう手助けしていました。黙っていることによって、私はある程度の影響力をふるうことができました。黙っていることによって、私は周りの女性たちの友情と信頼を保っていました。黙っていることによって、私は快適な生活を保っていました。

しかし私は、パウロの女性たちについての真実を知っていました。聖書の中で称えられている女性たち――フィベ、プリスキラ、ユニアのような――が、現代の聖書的女性像の限界に疑問を突きつけているという現実を知っていました。歴史家として、私は、自分の教会の女性たちが指導的な役割から遠ざけられているのは、ローマの家父長制が初期の教会に再び染み込んできたからだと知っていました。異教のローマを脱ぎ捨ててイエスをつかむ代わりに、私たちはその反対のことをしてしまったのです――キリストの自由を手放し、古代世界の抑圧を受け入れてしまったのです。

私は流しの水を止め、食器を積み重ねました。

もう黙っているのはやめる時でした。

注

1. 補完主義（Komplementarismus）とは、英語圏では、男性と女性が補い合うことを意味しますが、それは階層的な秩序の中でのことです。その秩序においては、創造の秩序の結果あるいは表現として、男性が導き女性が従う、あるいは女性は男性に単に補い合う者として位置づけられるだけでなく、従属させられています。ベス・バーとドイツ語訳者は、他の多くのキリスト者と共に、階層的な上下関係のない、男性と女性の相互の補い合いを主張しています。
2. ルターは、家の中での生活や互いの間の生活を規定したこれらのテキストを「家庭訓」（Haustafeln、直訳「家の板」）と呼びました。
3. 多くのドイツ語訳でも同様です。